

支えあって生きる

埼玉県・本庄市立本庄南中学校 1年
林 凌平 (はやし りょうへい)

基本的人権の尊重。今までの自分が人権について知っていることと言えばこの言葉ぐらいだ。日本は、世界に比べれば平和で安全な国だし、自分もその国で、何不自由なく幸せに暮らしていた。そうあの日までは・・・。

三月十一日の東日本大震災は、たぶん日本の歴史に残る大きな災害だ。教室の後ろに掲示してある歴史年表にも、いつか刻まれることと思う。ぼくは、その被災地に住んでいた。地震で建物が壊れたりしたものの、家族や友達、地域の方々に亡くなった人はいなかった。

しかし、地震の後の原発事故のため、ぼくと家族は家を離れ、友達や親しい人たちと別れなければならなくなった。生まれ育った故郷を離れなければならなかったのだ。

人権をおびやかすもの。戦争や紛争、貧困、差別や偏見、環境破壊など、今までの自分にはなんの興味もなかったことだった。まだ戦争や紛争中で、子供たちの命が危ない国があることも、戦争は終わったけれど、貧困のため食べるものがなく、病気になっても満足な治療も受けることができない国があることも社会で学習した。テレビでそんなニュースを見れば、かわいそうだと思ったし、争いがよくないことも分かっていた。

しかし、それは自分にとって、遠い遠い国の出来事で、自分の心を痛めるようなことではなかった。まさか自分たち家族が、家を無くし、日本中を転々と移動しながら、目に見えない恐怖におびえ逃げまどう避難民になろうとは、想像もしていなかった。避難所では、配給のおにぎりを妹と半分にして食べた。薄い毛布にくるまり、寒い夜を過ごした。ラジオのニュースを聞くのが、とても怖かった。

避難先でぼくと妹は、父に言われたことがあった。

「これから先、もしかしたら、おまえたちは差別を受けることがあるかもしれない。福島は被曝という厳しい現実と向き合わなければならないからだ。心ないことを言う人がいても我慢をしていこう。そういうときこそ、人の本当の温かさが分かる。人とのつながりがどんなに大切か分かるはずだから。周りをし

っかり見ていきなさい。」

その時は、父の言葉の意味がよく理解できなかった。いつになく真剣で、悲しそうな父の顔が印象に残っただけだった。

自分は今、埼玉県本庄市に暮らし、学校にも通っている。なつかしい故郷にはまだ帰ることはできないが、新しい友達もでき、幸せだと思う。

初めて学校に行く日は、とても緊張していた。自分が福島から来たことで、被曝者と言われたりしないか、無視されたりしないか、汚いものを見る目で見られたりしないか、不安でしょうがなかった。

しかし、友達への反応は違っていた。自己紹介で、福島から避難してきたことを聞いた時は、一瞬驚いていたが、次の瞬間からは他の友達となんのかわりもなく接してくれた。

みんなの態度は、ぼくにとって、とてもありがたかった。かわいそうにと思われてもかまわないが、ぼくは一人の中学一年生として、生活がしたかった。校長先生や他の先生方、先輩方にも、時々声をかけていただいたが、普段は他の友達と同じように、時には厳しく、時には優しく接して下さる。そんな生活の中で、ぼくは、自分が避難してきたことを忘れてしまいそうになる。

このように、ぼくは、差別という人権侵害を一度もうけることがなかった。ぼくの人権を尊重し、受け入れてくれた皆さんにとっても感謝している。

人権を守るというのは、自分の力ではなかなかできないのではないかと思う。自分の人権は、誰かに守ってもらっているのだ。それは、家族だったり友達であったり、地域の人々だったりする。それだけではない。見ず知らずの人であっても、傷付け合ったりせず、お互いに人権を守り合うことが大切なのだと思う。それが、人権を尊重するということではないだろうか。

震災は、自分にとって人とは何か、幸せとは何かについて考えたり気づいたりするよい機会になった。一番大切なことは、一人ひとりが、何が差別で何が人権侵害なのかを、しっかり考えることだと思う。そして、相手が何を望み、どう接してほしいのかを考えてあげることが必要だ。

ぼくの未来はまだ何も見えてはいない。しかし、ぼくには分かったことがある。それは、世界のどこにいても、どんな困難にぶつかったとしても、それぞれの人権や自由を守ることができる社会さえあれば、人は幸せに生活できるということだ。

父の言葉には、そんな意味があったのかもしれない。それはまだ分からないが、今自分ができることをして生きていきたいと思う。

それが、「支えあって生きていく」ということではないだろうか。